じゃあね

ぱじゃまくんくん男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
じゃあね

【Ｎコード】
Ｎ１３２９Ｑ

【作者名】
ぱじゃまくんくん男

【あらすじ】
僕がいなくなった彼女との何もない日常を思い出す話。
思い出っていつだって綺麗だから、余計につらいよね。

びゅうびゅう鳴いている。
風の強い夜は寂しい。孤独のうちにただただ風の音を聞いていると、自分だけが遠くの日々に来てしまったような心もちになってくる。
それでも、テレビの音、ステレオの音、何の音も出さずに、この時にしみじみと居続ける。
どんな行動も、慰めの手立てにはならないから、この時にふけってしまっている。
寂しい。
彼女との間に夢はなかった。彼女との二年間は、繋がっているだけの二年間であった。他には何もない。彼女を見つめていた光景は、四季折々に降り注ぐ光のまばゆさに霞んでしまっている。記憶の中に手を伸ばしてみても、まばゆさの中に指先は泳いでしまう。
ただただ、僕は彼女に見つめられている。柔らかい眼差しで。
繋がっているだけ。
彼女もそれを知っていた。しかし、僕たちは繋がってさえいればなんとかなると思っていた。
だから、あらゆる記憶の中で、彼女の眼差しはいつも優しい。
休日、顔を合わせたとしても、どこに行くわけでもない。部屋に閉じこもるわけでもない。ただ、ぶらぶらと近所を歩く。今日やるべきことを探す。見つからない。だから、ハンバーガーショップに立ち寄る。彼女は僕を見つめる。
幸福だった。
だから、彼女にはいつも光が降り注いでいる。それ以外の彼女は忘れてしまった。僕は彼女がとても好きだったようだ。
だが、未来を見つけられなかった。繋がっているだけの関係に、不安があった。いつか切れてしまうのではないかと。

「だまされた」
ふふ、と、彼女は笑う。
どうしてなのか訊ねると、彼女は首を振る。
「冗談」
二人で歩く細い路地。鉢植えを並べている家が多かった。すれ違う人々は老人と子供が多くて、のんびりとしていた。すぐ近くに副都心の高層ビルが並んでいたけど、彼女の住んでいた町は小さな駅の町だったから。
「結局、何もしなかったね」
僕は謝った。
「いつもと同じ」
彼女は僕のシャツをつまむ。僕たちはほとんど手を繋いで歩かない。一度繋げば、別れるときに手を離さなくちゃいけない。そのときにきっと思う。離さなくちゃいけないけれど、離したくはない。そんな悲しい時間が嫌だ。
「来週の土日も休み？」
僕が頷くと、彼女も頷いた。
「私も休み」
彼女のアパートの前にやって来て、僕は一言、じゃあね、と、言う。もっと、何か言いたいことはあったけれども、何を言えばいいのかわからない。
僕は彼女に背中を向けて、彼女と別れた。
「待って」
その声に振り向くと、彼女はすぐそこにいる。そして、いつのまにか彼女の唇が僕の唇に添えられた。
一瞬の出来事だった。
唇を離した彼女は、眼差しを柔らかくしながら、微笑んだ。
「じゃあね」
夏だった。
風の強い夜は寂しい。自分だけが遠くの日々に来てしまったよう

に感じる。もしくは、取り残されてしまったか。
布団に入り、目を閉じれば、そこには暗闇が待っている。
慰めの手立ては見つからない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1329q/

じゃあね

2011年1月16日04時43分発行